研究会紹介 函館日ロ交流史研究会の活動

奥野　進（函館日ロ交流史研究会）

函館日ロ交流史研究会の結成

1993年2月20日、会員32名で函館日ロ交流史研究会が発会した。きっかけは、1992年11月に初代会長鈴木旭（当時北海道大学水産学部教授）らが、「函館とロシア極東地方の交流史」という課題で北海道科学研究費の助成を受け、ウラジオストク市のロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所を訪ねたことだ。研究所ではB.L.ラーリン所長はじめロシア側の研究者らとの研究交流の話がまとまり、研究交流の「場」が必要となったのである。

以来、「日本とロシア、とくに函館とロシア極東地域の交流史に関する研究を行い相互の経済・学術文化交流の強化」（会則第3条）をし、両地域の相互理解と友好関係の推進のために、埋もれていた交流の歴史を市民レベルの問題意識で掘り下げ、シンポジウム・研究会開催、会誌・報告書の発行などの活動を行ってきた。

会員は、現在約50名に増加し、半数近くが市内在住者で、道内、関東、関西各地の大学教員、博物館職員、自治体職員、議員、教会司祭など多彩なメンバーが参加している。

これまでの活動

発足当初は、上記研究所とシンポジウムを毎年交互に開催することを主な事業とし、1993年9月の第1回シンポジウム「函館・ロシアの交流を探る―その歴史・文化・経済」（函館開催）を皮切りに、交流が続けられた（表1参照）。これらのなかで、今までに知られていなかった歴史的事実の紹介や新たな研究の視点等が論議され、日ロ関係の歴史について、一定程度の理解を深めることができた。

研究会発足4年目の1996年8月21日には、会員に会活動の報告を行うとともに、会員の相

表1　シンポジウムおよび主な講演

年・(開催地)	概　　要
1993年 (函館)	「函館・ロシアの交流を探る ― その歴史・文化・経済」 (アカデミー研究所　B.M.アフォーニン「日ロ関係の発展における人的交流の役割」、一橋大学　中村喜和「函館のロシア人旧教徒の生活」ほか)
1994年 (ウラジオストク)	「ロシア・日本交流の歴史：過去と現在」 (アカデミー研究所　V.V.コジェブニコフ「日ロ関係の形成における北海道の役割」、函館大学　鈴木旭「1907年の日露漁業協約と両国の漁業関係」ほか)
1995年 (函館)	「函館・ロシアの交流を探る ― サハリン・千島をめぐって」 (アカデミー研究所　A.T.マンドリク「1920−30年代のロシア太平洋沿岸地域における漁業への日本企業家の投資」、北海道大学　秋月俊幸「日露関係と蝦夷地」ほか)
1996年 (ウラジオストク)	「世界史のコンテキストにおけるロシア極東：過去から未来へ」 (東北学院大学　榎森進「アイヌ民族の過去と未来」ほか)
1997年 (函館) ＊北海道大学スラブ研究センターとの共催	市民交流セミナー「函館はいかにしてロシア極東地域との交流拠点をなりうるか ― 歴史・文化・経済交流を求めて」 (アカデミー研究所　V.V.コジェブニコフ「ウラジオストク市と函館市との関係」、サハリン州近現代史料センター　M.C.ヴィソーコフ「歴史の共同研究について」、北海道大学　原暉之「明治期のウラジオストク新聞通信員」ほか)
1998年 (ウラジオストク)	「世界史のコンテキストにおけるロシア極東：過去から未来へ」 (元岡山大学　保田孝一「ロシア革命前の日露関係」ほか)
1998年 (函館) ＊NHKと共催	「原点から探る日ロ交流 ― 初代ロシア領事赴任140年記念フォーラム ―」 (出席者：原暉之北大教授、パノフ駐日ロシア大使、荒井信雄北海道地域総研理事長、丹波実外務審議官、イリイン極東大学函館校長、鈴木千恵)
1999年 (函館)	ロシア国立極東総合大学100周年「函館・日ロ交流フェスティバル」において定例研究会「日ロ交流の接点を求めて ― 両国関係の歴史を学ぶ」を開催 (永野弥三雄、アナトーリイ・マンドリク、ゾーヤ・モルグンの報告)
2001年 (函館)	ロシア極東大学函館校「ロシアまつり」において工藤精一郎講演会「ロシアとロシア人」を開催
2003年 (函館)	創立10周年記念　2003函館・ロシア極東交流史シンポジウム「大正・昭和期に函館に来たロシア人」(鈴木旭「研究会の10年を顧みて」、ガリーナ・アセーエヴァ(コーディネーター小山内道子)「函館で暮らした頃の思い出」ほか)

(注) ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所は、アカデミー研究所と略。

互の研究情報の交換の場として、「会報」の発行をはじめ、2005年1月現在では27号を発行するに至っている。

さらに、1998年には、『市立函館図書館所蔵ロシア語資料目録Ⅰ』を発行するなど、地元史料の整理・調査等も行っている。

このような活動を続けてきた研究会も、2003年には発足10周年を迎え、記念シンポジウム「大正・昭和期に函館に来たロシア人」を開催した。戦前、函館市で亡命者として生活し、現在ロシア連邦サンクトペテルブルグに在住するガリーナ・アセーエヴァさんを招待して、ロシア人から見た戦前の函館の印象について話していただいた。

2003年の9月にはホームページを開設し、

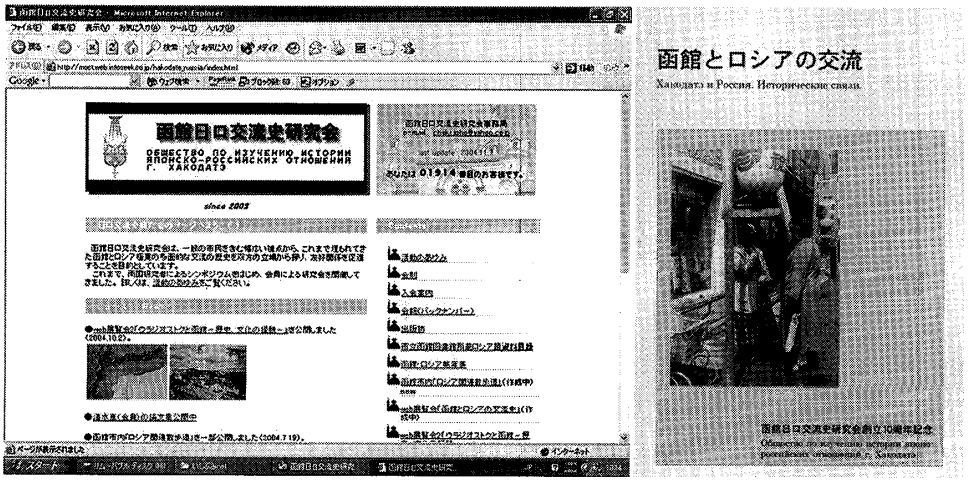
10周年記念シンポジウムで発表するガリーナさん

「会報」や報告書などのこれまで蓄積してきた情報の紹介のほか、さきに紹介した『市立函館図書館所蔵ロシア語資料目録Ⅰ』、函館で開催されたロシアに関する展示情報の公開など積極的な情報の蓄積と提供に努めている（URL:http://moct.web.infoseek.co.jp/hakodate_russia/index.html）。

「架け橋」として

函館は、江戸時代末期に日本最初のロシア領事館とロシア正教会が置かれ、北の「文明開化」の窓口となり、明治末期以降は露領漁業の基地として、日ロ間の人的、物流の拠点として発展してきた。現在も、在札幌ロシア連邦総領事館函館事務所や、ロシア極東国立総合大学函館校が設置され、ユジノサハリンスクとは定期航空路で結ばれ、また函館市とウラジオストク市、およびユジノサハリンスク市とは姉妹都市提携を結ぶなど、日ロ交流の要になっている。

近年は、こうした歴史背景を基礎とした研究交流から市民レベルの交流への転換を図り、2001年の極東大学ロシアまつりでの講演会共催や、2004年7月の沿海地方国立アルセニエフ博物館・市立函館博物館姉妹提携2周年記念企画展「ウラジオストクと函館―歴史、文化の経験―」開催に際しても、博物館職員の展示作業補助を行い、作業を通じた現場での交流を行っ



ホームページと創立10周年記念誌

た。

また昨年（2004年）11月には、極東大学本校から函館校への留学生たちを招いての発表会・交流会も行い、大学生の見た函館など、幅広く現代における情報の交換も行った。

今後もこれまでと同様に研究会を開催、「会報」の発行に加え、市民への情報提供と会員間の共通認識を養うため、函館市内に点在する函館とロシアを結ぶ史跡マップの作成や、ウラジオストク訪問などを行い、これまでの研究成果を「地域」に活かす事業を継続していく予定である。

事務局：代表世話人　長谷部一弘
041-0806　函館市美原1丁目35-36